

【外題】

里見八犬傳第二輯卷之一

【本文】

南總里見八犬傳第二輯卷之一

東都 曲亭主人編次

第十三回

尺素を遣て因果みづから訟  
雲霧を拂て妖孽はじめて休

伏姫は思ひかけなく、奇しき童に説諭されて、無明の眠覚ながら、夢かとおもふ跡とめぬ、人の言葉のあやしきに、なほ疑ひははれ間なき、涙の雨に敷妙の、袖は物かは腸を、絞るばかりに哽かへり、歎き沈せ給ひけり。しかはあれども心操、人なみくに立まさる、日來雄々しき姫うへなれば、うち騒く胸をおし鎮め、顔にかゝれる黒髪を、搔あげて目を拭ひ、「うたてやな前世に造りし罪は秤成、おもさ軽さはしらねども、遂にこの身に報ひ来て、かくまで物を思はする、人のうらみのしつねなきよ。遮、莫親のつゝへに、かゝる祟を肩にき、と聞ては後のその後の世まで、捺落の底に沈むとも、悔しと思ふべうもあらず。只はつかしく悲しきは、親の為、又人の為に、蓮き心もたなく、何を種なる畜生の、その氣を受けて八の子を、身に宿しなはいかにせん。そもこの山に入りし日より、鶴の林のしげきをわき、鷲の嶺の高きを仰ぐ、「一念不退読經の外は、よに他事なきものから、佛もこゝに救ひ給はず、神さへ助け給はず、有身れる事美ならば、よしや臥房を共にせずとも、それいひ鮮ん證據はなし。わがつへのみかは親の恥、九の世を換るとも、竟に雪る時しあらで、只畜生の妻といはれん。生ての恥辱、死してのうらみ、喻るに物あるべしや。斯とは兎の毛の末におく、露ばかりだもしらすして、曩に灌田にをりしとき、大を殺してもるともに、得死さるこそ悔しけれ。死すべき折はありながら、死おくれしも業因故。されは善巧方便とて、説おかせ給ふなる、佛の書にも有がたき、因果といふもあまりあり。よしやこの子の生るゝ故に、親同胞に幸ありて、家の栄をませはとて、こよなき恥にやはかえん、悲しきかな」と声立て、傍の人にものいふごとく、思ひ凝てはなかく、賢しき心も乱れつゝ、忍ぶに堪ぬ繁薄、尾花が下にふし給ふ。

秋の日影のさりげなく、昼間は暑の名残とて、岸に水浴る山鴉、頂近く鳴わたれば、伏姫信と仰ぎ瞻つ、現わが外に人もなき、こゝは寔に畜生道、この身を劈く劔の山路に、追登されし阿鼻地獄後の世思ひやられたり。「さるにても、彼童こそ不思議なれ。わが來しかたとゆくすゑを、審にしれる事、天眼通もて見る如し。加、旃物のいひさま、爽にして岩走る、この山川より委

く、禍福吉凶を断るべく、只掌を指すに似たり。いにしへの指の神子、俯の老女といふとも  
いとながたきわざなるべし。余れはこれ神ならで、誰か復これをよくせん。素よりこの安房に  
は、齡數百になりぬる醫師あることを聞されば、これに仕る神童あるべうも覚ぬかし。渠口假  
に言を設て、われは醫師の弟子にて、藥を採るといひつるもの歎。そのをる所も定かならで、この  
山の麓といひ、或は洲崎にありといふ。これにて思ひあはすれば、これも亦役行者の示現にもや  
をはしますらん。曩にもかゝる利益あり。それは穢き時なれば、吾侪定かにしらねども、正しく得  
さし給ひぬる、珠数は雲時も身を放さず、祈念懶る事なければや、再び奇特を見せ給へども、遂  
に脱れぬ業因は、神も佛も今こゝに、せんすべなくそをはすめる。斯ても凡夫のかなしさは、悟り  
かたく、迷ひ易かり。わが腹なるは八子にて、形つくらでこゝに生れ、生れて後に又生るとは、い  
かなる故にやあらんずらん。又、子を産るとき親にあはん、夫にもあはんとは、いよゝ思ひ辨へが  
たし。吾侪には苟にも、いひなづけたる良人はなし。この事のみは中らずとも、もし父うへがは  
るゝと、訪せ給はゞ影護し。身おもくなりしを親同胞に、恥かゞちかしく見られんより、流るゝ  
水に身を任し、骸もとゞめずなるならば、さて死恥をかくしなん。吁しか也」とわれに問、われに  
答てやうやくに、思ひ決めつ。折敷く草に、膝突立て身を起し、水際に立より給ひしか、「さるに  
てもこの仮に、水屑とならば日來より、川の向ひの岸までも、專使を給はりし、母うへのおん慈  
みを、しらざるに似て罪ふかり。一筆遣し奉らば、とてもかくても業因、と思ひ捨させ給はな  
ん。見る人なくばわが尺素も、朽なば朽よ命毛を、雲時延していそがんとひとりこちつゝ、折捨  
し、花かいとればほろゝと、ちり際脆き村肝の、心も足もなやかに、舊の洞にぞ入り給ふ。  
當下八房は、自然生の書積、杖つきの果なゞゞ、くさゞゞ銜もて来つゝ、姫うへを待てをり。  
只今かへらせ給ふを見て、一反あまり走り出長き袂に齋縁て、後に跟き、又先に立、尾を掉鼻を鳴  
しつゝ、迎入るるが如くして、只管食を勸れども、伏姫はなかゞに、見るも齋忌しく疎しくて、  
絶て言葉もかけ給はず。石室の端ちかうめて、硯に墨を搦流し、残りすくなくりにたる、料紙の  
皺を引延して、わがうへ、権者の示現まで、辞みじかく義理ぶかく、いと哀れにぞ写給ふ。折し  
もあれ、水は瀬まくらに轟きて、三間大夫がうらみ、想像るゝく、松は峯上に吟じて、有馬皇子が  
無常を示せり。「いにしへの世まで、賢きも愚なるも、直きも曲れるも、薄命にして屍を  
溝瀆野徑に曝せるもの、抑亦いくばくぞや。そが妻、そが子に至りては、数るにいとなかるべし。  
いつれはあれどわが身ひとつ、例すくなき業因にて、骸もとゞめず失にき、と母うへ傳聞給はゞ、  
そが假絶も果給はん。それまで在らずとも、なき後々へに限りなき、嘆きを倍させ奉る、不孝

の罪は贖ふ時なし。幾遍思ひたえなん、と思へども思ひ絶がたきは、只恩愛の絆也。許させ給へ」といへばえに、いはが根傳ふ松の露、袖の罩も未竟に、涙の川となるまでに、深きおもひを水壘の、筆にいはせて読かへし、巻かへしつゝ嘆息し、よしなく物を思ひにぎ、西方弥陀の利劍を借すは煩惱の羈を断がたし。冥土の旅の首途には、称名の外あるべからず、と忽地におもひかへしつゝ、手をりもて来し菊の花に、清水を沃て恭しく、佛に手向奉り、襟に掛たる珠数を取て、推搦んとし給ふに、常にもあらで首はせず。こは不思議や、と取なほして、とさまかうさま見給ふに、数とりの珠に躓れたる、如是畜生發菩提心の、八の文字は跡もなく、いつの程にか仁義礼智忠信孝悌となりかはりて、いと鮮に読れたり。

伏姫は又さらに、かゝる奇特を見る物から、なほ疑心を解よしもなく、つらゝおもひ給ふやう、この珠数はじめは仁義礼智、云云の文字あり。かくて八房に伴れ、この山に入らんとせし比如是畜生云云、と八の文字になりてしかば、果して件の一句のごとく、八房も亦こゝに、菩提心を發したり。介るに今又畜生四足の、文字は失て舊の如く、人道八行を示させ給ふ、權者の方便測がたし。いと淺はかなる女の智をもて、何と辨へ侍らんや。見る所をもて推ときは、吾侪は大の氣を受けて、平ならぬ身となりし故に、遂に非命に終ること、畜生道の苦難に似たり。されども佛法の功力にて、八房さへに菩提に入れり。來世は仁義八行の、人道に生るゝよしを、こゝに示させ給ふもの歎。もしさあらんには八房をも、わが手に殺さば畜生の、苦を抜くよすがとなりぬべし。いなゝそれは不仁なり。渠はその主の為に、大敵を亡したり。かゝれば是こよなき忠あり。又去歲よりしてこの山に、吾侪が飢渴を凌せたり。かゝれば又養ひの恩ふかゝり。よしや來世は人と生れて、富貴の家の子となるとも、その忠この恩あるものを、今情なく刃もて、死を促すに忍んや。これらのよしをありの隨に、告て生死を渠に任せん。さはとて珠数を左手に掛、前足立ちこなたのみ、眺めをる大にうち向ひ、「やよ八房、わがいふ事をよく聞けかし。よに幸なきものニッあり。又幸あるものふたつあり。則吾侪と汝なり。われは國主の息女なれども、義を重しとするゆゑに、畜生に伴る。これこの身の不幸なり。しかれども穢し犯されず、ゆくりなくも世を遯れて、自得の門に三宝の引接を希ひしかば、遂に念願成就して、けふ往生の素懷を遂なん。亦これこの身の幸なり。又只汝は畜生なれども、國に大功あるをもて、聽て國主の息女を獲たり。人畜の道異にして、その欲を得遂されども、耳に妙法の尊きを聴て、遂に菩提の心を發せり。これ汝が幸ひなり。しかれども生をかえ、形を変ふるによしなれば、こゝに四足の苦を脱れず。生てはその智をますことなく、死しては徒その皮を剥れん。亦これ汝が不幸也。汝生れてより七八

年、犬馬にしてはその命短しといふべからず。いたづらに生を食り、わが死するを見て里に還らば、友に噬れ、咎に打れ、呵責忽地その身に及ん。又この山に住るとも、翌よりしては誰か亦、汝が為に經を讀べき。梵音耳に入らずならば、菩提の心遂に失なん。只生を辞し死を樂み、人道の果を希はゞ、來世に人と生れざらんや。この理りをよくしらは、おなじ流に身を投て、共に彼岸に到れかし。さればとて時なほ早かり。われも浮世の名残なり。且おん經を讀誦して、心しづかに元に皈らん。汝もこれを聽聞して、讀果なんとするときに、起て水際に赴けかし。さりとも不覺に命惜くは、野なれ里なれ老死よ。尠らば人果を得るときなからん。よく辨へよ」と叮嚀に、諭し給へば、八房は、頭を低て憂ることく、又尾を掉て歡ぶ如く、又感涙を流すに似たり。伏姫はこの形勢を、つくく〜と見給ひて、この大誠に得度せり。怨るものゝ後身なりとも、既に仏果を得たらんには、弟義成が耳孫の世まで、絶て障礙はあるべからず。心やすしと思ひとりて、彼遺書と提婆品の一卷を手にて取て、洞より些すゝみ出、讀誦し訖らば遺書を、おん經に巻籠て、この石室に留ん、と思ひ給ひつ上平なる、石を机に坐を組て、彼一卷を額におし當、且く念じ給ひつゝ、はや讀出し給ふにぞ、八房は耳を側て、きくこと生平よりいと切なり。

抑提婆達多品は、妙法蓮華經、卷の五に在り。娑躺羅龍王の女兒かとよ、八歳にして智慧廣大、ふかく禪定に入て、諸法に了達し、菩提を得たる緣故を、説給へる經文なり。女人はこゝろ垢穢る。素より法器にあらず。又身に五

【挿絵】「妙經の功德煩惱の雲霧を披」「金まり大すけ」「玉つさ」「神変大菩薩」

障あり。故に成佛しがたきもの也。余るに八歳龍女のごときは、はやくも無上菩提を得たり。便是女人にして、成仏の最初たり。かゝれば伏姫末期に及びて、身の為又犬の為に、提婆品を讀給ふ。今を限りと思へばや、音声高く澄渡り、たえず又委すして、蓮の糸を引く如く、又出水の走るに似たり。峯の松風もこれを和し、谷の幽響もこれに応ふ。石を集て聴衆とせし、むかしもかくぞありけんかし。いと愛たき道心なり。

さる程に読經も既に果になりて、「三千衆生發菩提心、而得受記、智積菩薩及舍利弗、一切衆生默然信受」と讀給へば、八房は衝と身を起して、伏姫を見かへり見かへり、水際を指てゆく程に、前面の岸に鳥銃の筒音高く響して、忽地飛來るニツたまに、八房は吭を打れて、煙の中に礮と什しあまれる丸に伏姫も、右の乳の下打破られて、苦と一声叫びもあへず、經巻を手になながら、横さまに轉輾び給ひぬ。

時なるかな去歳よりして、川よりあなたは露ぶかく、絶て晴間もなかりしに、今鳥銃の音とゞも

に、拭ふが如く晴わたり、年なほわかき一個の獵人、柿に染たる袴の脚半に、おなじ色なる甲掛して、筵織の獵巾の緒を、結び放べて頂に掛け、右手に鳥銃引提て、前面の岸に立あらはれ、流るゝ水を信と見て、既に淺瀬を知りたりけん、馳て岸より走くだりて、拿たる鳥銃肩にうち掛、こなたを指てわたし來つ。この川ながれ急けれども、思ふには似ず淺して、水は高股を浸ざれば、彼壯伎はますゝ勇みて、勢ひ猛虎の子を肩ふごとく、又醉象の牝を追ふごとく、ちから足を踏進めて、その幅十丈あまりなる、流水を切て、瞬間に、こなたの岸に走あがり、且鳥銃を揮揚て、打倒したる八房を、なほ撃こと五六十、骨砕け皮破れて、復甦へうもあらざれば、莞尔と笑て鳥銃投捨、いで姫うへを、と石室のほとりまで進み寄り、と見れば亦伏姫も、打倒されて氣息なし。これはとばかり駭きさわぎて、抱き起し奉り、且瘡口を展檢るに、幸にして痕は淺かり。周章き懐より、藥を取出て、口中に沃き入れ、頻りに喚活奉れども、寸口の脈絶果て、全身ははや氷の如し。縦元化が術ありとも、救ふへうも見え給はねば、壮伎は天うち仰ぎて、數回嘆息し、「悲きかなわがなす所、謀る所は、悉、鵞の膏と岩齧ひ、月來日來晴かたき、狹霧は晴つ、八房を、撃とめて來て見れば、あまれる丸に姫うへさへ、竟に綻絶給ひにき。出沒奇異なる大にもおそれず、固りこゝは禁斷の山としりつゝ身を忘れ、命を捨ても姫うへを、救ひとりまぬせん、と思ふ忠義は不忠となりて、又万倍の罪を醸せり。百遍悔ひ、千遍悔とも、今はしもかへることなし。心ばかりの申わきには、肚かき切て姫うへの冥土のおん俱仕らん。またせ給へ」と襟かき披きて、腰刀を拔出し、手拭に巻そえて、「南無阿彌陀仏」と唱もあへず、はや刀尖を脇腹へ突立んとする程に、誰とはしらず松柏の、林が下に弦音高く、射出す獵箭に仕伎が、右手の臂射削たり。これはとばかり、思はずも、拿たる刃をうち落され、驚きながら見かへれば、樹間隠れに声高く、「颯は木末求むと足引の、山の佐都雄に遭にけるかも」と、口吟む一首の古歌に、「こは何ぞ誰」と問せも果す、「金碗大輔早まるな。且く等」と呼とめて、里見治部大輔義實朝臣、熊の皮の行膝に、豹の尻鞆、篠針して、弓箭携へ徐やかに、樹蔭をすゝみ出給へは、後方に続く従者なく、堀内藏人貞行のみ、精悍しき打扮して、主の左邊に引そふたり。義實患る気色にて、伏姫の亡骸を、尻目にかけて、最期の事は、いまだ何とも宣はず、いちはやくもほとりに落たる、珠数と遺書を見給ひて、「藏人あれを」と宣ふにぞ、貞行はこゝろ得て、遽しくとりてまぬらす。義実朝臣は弓箭を捨て、珠数を刀の鞘に掛、且遺書を見給ふに、一句一段ごとく、に、嗟嘆せずといふ事なく、又貞行にも見せ給ふ。そが中に、金碗大輔孝徳は、慚愧その身を置ところなく、額に冷き汗をながし、刃を膝にひき敷て、只平伏てぞめたりける。

當下義実は、傍の石に尻を掛けて、孝徳にうち對ひ、「称らしきかな金碗大轉、汝不覺に法度を犯して、この山に入るのみならず、今伏姫と八房を、うち殺せしには仔細ありなん。刃をおさめ、近づ参りて、詳にこれをいへ。いかにぞや」と問給ふ。しかれども孝徳は、應まつすも面なく、雲時頭を得も拳す。「この形勢に真行は、そがほとりにすゝみ出、大輔御説で候ぞ。且刃をおさめずや。とくおん答を申さずや」としはゞいはれて、孝徳は、やうやくに頭を擡、刃を鞘に納めつゝ、挿副の刀もろ共、是をば堀内真行に、遞与て些し引退き、又真行に對ていふやう、「死後れたる甲斐に、圖すも君の尊顔を、拜し奉る歡びも、重々の越度にて、後悔の外候はず。申とくべき千万句も、この期に至て詮なき所行、身の非を飾るに似たれ共、只一條を申上ん。去年安西景連に謀られて、安危のおん使を得果さず、脱れて走る道すがら、追捕の敵兵と血戦し、辛く瀧田へ立かへるに、はや景連が大軍充滿、稲麻のごとく攻囲む最中にて候へば、城に入ること竟に協す、切て和殿に力を戮し、一臂の忠を盡ん、と思ふて艦で東條へ、走ゆけどもその甲斐なく、彼処も無戸訥平が大軍に囲れたり。敵は虎口を退かず、夜は箭火を焼あかし、番兵をさゞ由断せされば、趨なうして城中へ、入るべうも候はず。一騎なりとも敵陣へ、突入て死ばや、と思ひ決め候ひしが、退きて思慮をめぐらし候へば、これも亦詮なき所行也。五指のかはるゝ弾んより、一拳にますことなし。西城素より兵糧乏し。寔に危窮存亡の秋なり。われ鎌倉へ推参して、管領家へ急を告、援兵を乞催して、両所の囲みを殺崩さば、君のおん為此上あらじ、と思ひかへして白濱より、便船して彼処に赴き、來由を述べ、急を告、援兵を乞といへども、主君の書翰なきゆゑに、疑れて緯とくのはず。そらだのめなる日を過し、手を空して安房へかへれば、景連ははや滅亡て、一國君がおん手に属ぬ。吁歎し、と思ふにも、寸功もなく阿容々々と、見参には入りかたし。然りとて今さら腹も切られず、時節を俟て功を立、帰参を願ひ奉らん。それまでの隠宅にとて、舊里なれは上総なる、天羽の関村に赴きて、祖父一作に由縁ある、莊客某甲が家に身をよせ、なすこともなく去歳と暮れ、今茲もおなじ秋の色、深く潜ひて候ひしに、本月の初旬、姫うへの事友に聞えて、八房の犬に伴れ、富山の奥へ入り給ひき、と慥にこれを告るものあり。こは未曾有の奇談にして、偏に主君の瑕瑾也。よしや彼大年ふりて、人を魅るゝ靈ありとも、目に遮るものならば、擊にかたきことやはある。竊に富山にわけ登り、犬を殺して姫うへを、救ひとり奉らは、先非を贖ふ帰参のよすが、こゝに得たり、と尋思して、潜ひて富國に立かへり、準備の鳥銃引提て、山に入ること五六日、姫うへのおん所在を只顧索、奉るに、あなたの岸には狹霧ぶかくて、一ト日も晴るゝときを得ず。水の音のみ凄しく、廣陝深淺も測がたかり、蛭崎輝武が溺死の事さへ、傳聞て

候へば、こゝなるべし、と推量して、かろくしくは得渉さず。川一條に隔られ、奥を見ることかなはねば、けふも空く暮すか、とこゝろ頻りに焦燥のみ。果は疲勞て水際の松に、尻うち掛けてながむれども、見れども見えぬ溪澗の、はるかあなたに縋らむ声、いと幽に聞えたり。すはや、と騒ぐ胸を鎮め、水際にすゝみて、耳を側て、つくく〜と聞は女子の声也。こは疑ふべうもあらず。姫うへにましますべし。既にそのおん声を聞つ。いまだおん姿を見るによしなし。この時にして神明佛陀の冥助を仰ぐにあらざりせば、志を遂かたけん。當國洲崎大明神、那古の觀音大菩薩、孝徳が忠義空からずは、狹霧をおさめてこの川を、輒くわたさせ給へかし、と丹誠を抽つゝ、且く祈念して目をひらけば、不思議なるかな今までも、黒白をわかぬ川霧は、拭ふが如く晴わたる。前面廻に眺望れば、石室とおぼしきほとりに、見えさせ給ふは姫うへなり。思ひしより瀬は淺し、何でふこゝろ勇ざらん。既にわたさんとする程に、八房はこなたを見てや、水際を指て走り來つ。這奴よせつけてはあしかりなん。撃とめて後にこそ、彼処へはまゐらめ、と思ふ矢こゝろは程よくなりぬ。拿たる鳥銃取なほし、狙固めし二ツだま、火蓋を切れば怨たす、犬は水際に仆れたり。わが物獲つゝ、と早川の水よりはやく涉來て、見れば又姫うへも、あまれる丸に傷られて、おなじ枕にふし給ふ。さりけれども痕は淺かり。濟れ給ふこともや、とこゝろを盡し、手を彈せども、緯絶給へばすべもなし。身の薄命とはいひながら、毛を吹て疵を求めたる、後悔其処に立ざれば、切て冥土のおん俱せん、と既に覺期を究し折、思ひかけなくわが君に、禁られ奉り、得死ざるも天罰ならん。法度を犯してこの山へ、しのび入るのみならず、姫うへさへに害ひしは、是八逆の罪人也。君がまに〜刑罰を、希ふ外候はず。堀内ぬし、蔵人どの、索かけ給へ〜と背さまに、手をめぐらしてついゐたり。

貞行は孝徳が、忠心をよくしりつ、聞く事毎に點頭のみ。主君の気色を伺へば、義実嗟嘆大かたならず。且して言ふやう、「現禍福得失は、人力をもてよくしかたく、凡智をもて揣べからず。やをれ大輔、汝寔にその罪あり。刑罰道れかたしいへども、伏姫が死は天命なり。渠もし汝に擊れずは、かならずこの川の水屑とならん。蔵人その遺書を、讀聞せよ」と宣へば、「うけ給はりつ」と應つゝ、大輔がほとりについて、首より尾まで、高やかに讀ほども、孝徳ます〜慚愧して、伏姫の賢才義烈に、感涙を拭ひあへず、いよゝ愈忽を悔歎きぬ。讀果ければ義実は、又孝徳にうち對ひ、「大輔何とこゝろ得たるぞ。伏姫が死を禁んとて、われ亦潜びて來つるにあらず。此度五十子が病著は、只伏姫を愛惜の心氣疲勞れて危急に及べり。渠が願ひも然ることながら、無異にしてこの山の奥を見んこと心もとなし、とさまかうさま思ふ折、われのみならで蔵人さへ、如此々々の

示現を得たり。よりて従者等を麓に留め、只われと貞行と、この山に登るものから、示現に任して川をわたさず、速く水上をめぐりつゝ、この石室の背に到れり。主従既にこの処に、近つかんとする程に、鳥銃の筒首に、うち驚きて来て見れば、伏姫も八房も、矢庭に撃れて仆れたり。折から川を渉すもの、問ずして伏姫が誓なりけり、と見てければ、曇時樹蔭に躲ひて、緋のやうを窺ふに、言おもはんや癪者は、月來日來こゝろに懸りし、金碗大輔ならんとは。渠驕きたるおもうちにて、姫を呼活手を盡す、療養竟に届すして、自殺の覚期は野心もて、姫を殺せしものならず、と思ひにければ呼とめたり。汝みづから思惟よ。大を殺して伏姫を、すくひとらるゝものならば、義実こよなき恥を忍び、最愛の女兒をすてゝ、けふまで汝が手をまたんや。賞罰は政の樞機也。言一たび出るときは、驕も舌に及す。戯言といへども八房に、われ伏姫を許したり。この一言にて剛敵亡び、四の郡は義実が、掌に入りし事、只八房が大功なれば、われも前諾を變ふるに由なく、姫も亦これを固辞はず、そがまゝ大に伴れ、蹟を深山に住むといへども、幸にして穢されず、一念読經の功力によりて、八房さへに菩提に入りぬ。渠が姪欲なきを見て、伏姫これを憐り。憐ふ心深くして、しらすしてその氣を感じ、有身れることいよゝ奇なり。今その筆の迹を見て、この禍の胎るところ、因果の道理を知覚せり。われ當國に義兵を揚て、山下定包を討しとき、その妻玉梓を生拘つ。陳謝理りあるに似たれば、赦し得させんといひつるを、大輔が父八郎孝吉、いたく諫て頭を刎たり。これによりてその冤魂、わが主従に祟をなす歟、とはじめて心つきたりしは金碗孝吉が自殺のとき、朦朧として女の姿、わが眼に遮りにき。かくてかの玉梓が、うらみはこゝに嘸らず、八房の犬と生かはりて、伏姫を將て、深山邊に、隠れて親に物をおもはせ、伏姫は、又思ひかけなき、八郎が子に撃れたり。加以大輔は、罪なつて亡命し、忠義によつて罪を獲たり。皆是因果の係るところ、縁故を推ときは、ひとり義実が愆より起れり。物がいはせて八房に、伏姫を許せしは、赦すまじき玉梓を、助んといひし口の過、言葉の露は未竟に、この深淵に落あふて、くるしき山に生死の、海を見るこそ悲しけれ。さりとして歎くは詮なき事なり。神霊に正あり邪あり。神の怒るを罰といひ、鬼の怒るを祟といふ。彼玉梓は悪霊なり。伏姫が死は祟なり。大輔さへに脱れず、不憶罪を得たり。寔に故ある事なれば、憾みなせそ」と身を謹て、いと叮嚀に諭し給ふ。

叡智に感じて孝徳は、思はずも小膝を進め、「御説によつて父が自殺も、身の薄命を暁るに足れり。しかれども猶疑ひあり。八房すでに菩提に入らば、悪霊祟をなすべからず。君は權者の示現によりて、姫うへを訪せ給へば、縦定業にましますとも、神仏のちからをもて、けふ一日は恙

なく、姫うへこゝに在すべきに、御登山その甲斐なき事は、いかなる故に候はん」と問奉れば、  
貞行も、小膝を拍て、側より、「大輔微妙申したり。わが君のみにまします。一ト日も晴ぬ川霧  
の、忽地晴れしは和殿がうへにも、神佛の冥助あるに似て、その実はみな非なり。これらの事は  
某も、「こゝろ得がたく候」と真実たちて申すにぞ、義實朝臣うち點頭、「われも亦神ならねば、定  
かに思ひ辨ねども、禍福は糾る纏の如し。人の命は天に係れり。われこの山に到すして、伏姫む  
なくならんには、渠只犬の妻といはれん。則姫が節操徳義と、八房が菩提に入りしを、親に  
も世にもしらせんとて、權者の導き給ふなるべし。然あらんには玉蜻の息あるうちにあはずとも  
その甲斐なしといふべからず。又川霧の晴間なくて、伏姫も八房も、大輔に撃れすは、共にこの川  
の水屑となりなん。縦遺書ありといふとも、しらするものは情死といはん坂。さては遺恨の事な  
らずや。今さらいふべき事ならねども、大輔が父八郎は、功ありながら賞を受す、自殺せし事不便  
也。いかでその子を取り立て、東條の城主にせん、伏姫をもて妻せん、と思ふ折から大輔は、使  
して遂にかへらす。伏姫は八房に伴れて深山に入りぬ。こゝに至りて予が宿念、画餅となりてい  
とゞしく、こゝろに愧ること多かり、この婚縁は明々地に、とり結るにあらねども、親が心に許せ  
しかば、伏姫に示したる、神童が言葉にも、親と夫にあはんといひけん、夫は汝をいふなるべし。  
かゝる故に姫と犬とを、大輔に撃し給ふ坂。則權者大方便の妙所といはんもいとかしこし。因縁  
かくの如くならば、誰をか咎、誰をか恨ん。弦強ければ、かならず弛む、物極れば、かならず休  
今よりしてわが家に、霊の障礙はあるべからず、子孫ますく繁昌せん坂。さは思はずや」と諭し  
給へば、貞行も孝徳も、疑念は春の氷のごとく、解て落流したりけり。  
且して孝徳は、襟かき合せ、形を改め、「冥加に餘る君の高恩、御胸中に秘させ給ひし、婚縁  
の事などは、うけ給はらんも物体なし。固よりしらぬことながら、こゝろありて姫うへを、救ひと  
らんとせしこともや、と後にぞ人はいふべからん。只速に某が頭を刎させ給へかし」と又他事  
もなく申けり。義実これを聞あへず、「そは勿論の事ぞかし。さりながら、心をつけてつらく見る  
に、伏姫が瘻はいと淺かり、もし甦生する事あらば、汝を殺すも早からずや。われ熟この珠数を  
見るに、如是畜生云云の一句はさらにはじめにかへりて、仁義八行を示すものから、靈験は失べか  
らず。余るに姫が倒るゝとき、この珠数その身を離れしかば、浅漬なれども絶入けん。渠は穢き時  
よりして、この珠数をもて安危を知れり。縦命数彈るとも、祈らば利益なきことあらんや。緯協  
ずは是非もなし。かくてや已ん」と鞆に掛たる、珠数とりあげて額におし賞、且く念じて伏姫の襟  
に手つから掛給へば、貞行孝徳左右より、むなしき骸を抱起し、役行者の番号を唱て、只願祈念

する程に、伏姫忽地目を睜きて、一息吻とつき給へば、貞行孝徳歡喜に堪ず、「姫つへ御ころつかせ給ふ坎。蔵人にて候ぞ。大輔にて候ぞ。おん父君もわたらせ給ひぬ。おん心持はいかに候ぞや」とはれて左右を見かへりつゝ、取られたる手をふり放ち、諸袖顔におし當て、只潸然と泣給ふ。現理り、と義美は、間近く寄て袖引揺し、「伏姫さのみ愧給ふな。こゝには主従三人のみ。従者等はみな麓に在り。此度母の願によりて、義美みづから來つる事、一朝の議にあらず。權者の示現によるもの也。おん身がうへ、又八房が事さへに、遺書を見てしれり。余るに金碗大輔は去歳より上総のかたにをり、おん身がうへを傳聞て、弱冠のトすぢころに、緯の顛末問も定めず、おん身を救ひとらんとて、われより先にこの山に、潜び入つゝ八房を、撃倒したる丸拔て、おん身も浅痕を肩給へり。八房が死は不便なれども、大輔に撃れし事、是亦因縁なきにあらず。渠はわがころひとつに、女増にせばやと思ひしもの也。さればこそ、書遣されし、神童が言葉にも親と夫にあふよしをいはずや。枉て滝田へ立かへり、病斃ひし母がころを、慰め給へ。やよ伏姫」と理り切て論し給へは、貞行等もろとも、「御帰館の事勿論也。一旦の義によりて、八房に伴れ、一年あまりこの山に隠り給へば、その事果たり。よしや是より遁世の、おん志ふかくとも御孝行にはかえがたけん。かへらせ給へ」ところへつ、賺しつ斬り奉れば、伏姫は涌かへる、涙をしばし押拭ひ、「舊の身にしてあるならば、親のみづから迎へ給ふ、仰を背き侍らんや。かくまで過世あし引の山の獸に異ならで。火鉦に打れて身を終りなば、人なみくに外れたる、罪滅しに侍らん、それかなはずはつかしき、この形容を親に見せ、人に見られて阿容々々と、いづれの里へかへらるべき。餌に啼く鳥の巢だちせず、片羽なる子は可愛さも、八しほにますと鄙語にいふはまこと坎飽までに、慈愛せ給ふなる、家尊家母のおん歎き、譬ていはゞ夜の鶴、つま恋せなどわれも又、焼野の雉子ひとり鳴く、涙の雨は涕かへり、わかかへるまで苦しき海を、けふ脱れんと命毛の、筆に遺せしかすゝを、何とか見させ給ひけん、火宅を出て煩惱の、犬も菩提の友なれば、この身は絶て穢されず、犯されねども、山官の、実ならぬ身さへ結びては、有無の二ツをわれからに、決めかねてぞ侍るか。又父への御ころに、そを増がねにと豫より、思食たるものありとも、この期になりて云云と、聞えさせ給ひては、人も得しらぬおん愆を、かさねさせ給ふならずや。譬は金碗大輔と、休伏の因なしといふとも、親のころに許させ給ひし、夫に肩きて八房に、伴れなば、をんなのうへに、こよなき不義に侍るべし。素よりわらはに増がねの、ありとしるべきよしもなし。わらはもしらず、渠もしらず、君ひとり知召は、墳に劔を掛るもよしなし。又八房を夫とせば、大輔はわらはが為に、こよなき譬に侍るめり。八房もわが夫に侍らず、大輔も

またわが良人ならず。この身はひとり生れ来て、ひとりぞ帰る櫛出の旅、留め給ふはおん慈み、過てあまりに情なし。いとまかしこし親の恩、思へば高き山斧の、迎を推辞奉るは、不孝のうへの不孝也。又あひかたき時も日も、見かたき親のおん顔も、見つゝしりつゝまぬらぬは、此身に重き罪障の、やるかたもなき故なれば、思ひ捨て給へかし。これらのよしを母つゝへに、勸解言告て、百年の、おん壽を願ふのみ。とてもかくても淺ましき、姿を見られ奉りては、亡骸かくすも無益なり。孕婦の新鬼は、みな血盆に沈むといふ。それも脱れぬ業報ならば、厭ふも甲斐なきことながら、その父なくてあやしくも、宿れる胸をひらかずは、おのが惑ひも、人々の、疑ひも又いつか解へき。これ見給へ」と臂ちかなる、護身刀を引抜て、腹へぐさと突立て、真一文字に挿切給へば、あやしむべし瘡口より、一朵の白氣閃き出、襟に掛させ給ひたる、彼水晶の珠数をつゝみて、

【挿絵】「肚を裂て伏姫八犬子を走らす」「ほり内貞行」「里見よしさね」「金鞠大すけたかのり」「伏姫」「おさめつかひ」「をとめ使

虚空に升ると見えし、珠数は忽地弗と断離れて、その一百は連ねしまゝに、地上へ夏と落とゞまり、空に遺れる八の珠は、粲然として光明をはなち、飛遠り入紊れて、赫奕たる光景は、流るゝ星に異ならず。主従は今ざらに、姫の自殺を禁めあへず、われにもあらで蒼天を、うち仰ぎつゝ目も黒白に、あれよゝゝと見る程に、颯と音し来る山おろしの風のまにゝ八の灵光は、八方に散失て、跡は東の山の端に、夕月のみぞさし昇る。當是数年の後、八大土出現して、遂に里見の家に集合、萌芽をこゝにひらくなるべし。かくても姫は深痕に屈せず、飛去る灵光を目送りて、「歡しやわが腹に、物がましきはなかりけり。神の結びし腹帯も、疑ひも稍解たれば、心にかゝる雲もなし。浮世の月を見残して、いそぐは西の天にこそ。導き給へ弥陀仏」と唱もあへず、手も軛も鮮血に塗るゝ刃を抜捨、そがまゝ礮とぶし給ふ。こゝろ言葉も女子には、似げなきまでに遅しき最期は特にあはれ也。